
扉の向こう

三村佐鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

扉の向こう

【Zコード】

N4397V

【作者名】

三村佐鳥

【あらすじ】

学園の旧校舎を自分たちの根城にしていた歩と桂。ある日、地下に隠し部屋を見つけた二人。その扉の向こうには、見たこともない世界が広がっていた。――ヶ月ごとくらいのノロノロ更新でお贈りします。

1・1（前書き）

学校の授業中に考えていたお話を。最後までお付き合いいただければ幸いです。

目を覚ますと、妙に風通しが良いことに気が付いた。

歩の席は一番前の、廊下側から一列目。よっていつもならあまり風は感じられない。しかし今は、窓からダイレクトに流れてきたと分かる風が、かすかに髪を揺らしている。

歩は、廻谷歩はノートに張り付いていた顔を引き剥がすと、大きく伸びをして、

そして周りの机が無いことに気が付いた。

(げ……これは、もじや)

固まつた歩に、

「せい」

「おふつ……何をする卑怯者」

後ろからつつく人物がいた。

振り向くと、案の定顔中ニヤニヤ笑いの幼馴染が立っている。

稻川桂。中性的で涼しげな顔立ちに、高1にして175の高身長、黒髪ショートの、歩の腐れ縁的な存在である。

「おそよつ歩。とりあえず邪魔だから机下げていいか

「あーやつぱり……。一応聞くけど今何時?」

「3時20分」

「……なんで誰も起こしてくれないの」

何ということだ。机が無いのも当たり前、いつのまにか六時間目を通り越して、ついでに終礼まで飛び越えて掃除の時間ではないか。教室を見渡すと、勿論と言うか何と言つか、残っている机は歩のものだけで、すべて後方に下げられていた。

「あ、廻谷さん起きたー」

「ほんとだー」

「おはよー廻谷さん、よく眠れたー?」

歩が起きたことに気が付いたクラスメートたちが、声をかけてくる。

どうやら心優しい彼女たちは、爆睡している歩を起しかねないよしひと、『氣を使ってくれていたらしい。

「あ、ありがとう……どうか何かごめんなさい……」

「えーいよ別にー」

「すいません……」

謝りつつ、心優しくない隣の人間を睨みつけてしまふも忘れない。

「恨みのこもった良い目ですな」

「桂でしょ」

「何がー?」

ほう、すっとぼけるとはいい度胸だ。

「寝ている私をそのままにしたのは桂でしょ」

「あは、ばれちつた」

「桂が片田瞑つて舌出しても可愛くないから諦めなさい」とはあゝと溜息をついて、机の中の物を片付け始める。もう教室掃除も終わりそうだ。

「まったく……とんださらし者じやない」

「いやー気持ちよさそうに寝てたからさ」

「それで面白そだだから放つて置いて」

「イエスツ

「地獄行つてよ」

「そりやあムリな相談ですぜ」

「……むかつ」

* * * * *

教室掃除終わりー、という声がして、今まで箒を使っていたクラスメート達が用具入れに向かう。

「終わつた終わつたー」

自分の鞄のところに向かおうとする桂の背中、声をかけた。

「……桂つて教室掃除のはずよね

「さあ一歩、行こうかー！」

「簞は持つてゐけどちゃんと掃除したの？」

「どうかな。それはどうかな。開けてみなければ分からぬシユレ
ディンガーの猫。ふふふふ」

「また掃除サボつた、と」

桂はくるりと歩の方を向いた。

「大事なのは過程じゃない、結果なんだ！」

「それでもサボつたことには変わりないけどね、桂」

* * * *

歩の通う私立竹延学園たけのべは、伝統も知名度も人気もそれなりにある、中高一貫の女子校である。広々とした敷地を持ち、そのせいいかはわからぬが（多分そのせいではないだろうが）、運動部文化部共に活動が盛んで、特に弓道部と弁論部は全国トップクラスの実力を誇つていたりする。

そんな竹延学園だが、数年前に高校校舎の建て替えをした。もる70年以上使われ続けた校舎に限界が来たのだろう、壁や床が随分脆もろくなつていたようだ。

さて。普通は校舎の建て替えをする、と言つと、まずプレハブを建て、生徒たちは一年間程度そこに通い、その間に旧校舎を取り壊して新しい校舎を建てる、のだろう。しかし創立者一族がものすごいオカネモチだつたせいでバカみたいに広い敷地を持つこの学園は、そんなまどろつこしいことはしなかつた。

なんと旧校舎は取り壊さず、敷地内の別の場所に新校舎を建てたのだ。そして、その旧校舎は今でも残つてゐる。取り壊す必要がないから、らしい。いいのかそんな理由で。

旧校舎が残つたことで、喜ぶ人は多かつた。当然旧校舎に愛着のあるOGは多いし、歴史の感じられる校舎に憧れて入学した、という生徒だつて少なからずいる。しかしそのような理由ではなく、もつ

とマイナーな、はつきり言ってしまえば少しワルな理由で喜ぶ生徒もいた。

ワルい生徒その一が言つには、

「旧校舎つていいよな、人来ないし」

生徒その二。

「居心地良いのよね、清潔すぎる新校舎と違つて
つまり。

歩と桂は毎日放課後、勝手に旧校舎に忍び込んで、のんべんだらりと過ごしている訳なのだ。

一年生とは言え、もう勝手知つたるこの学園である。どの時間帯なら人に見られず旧校舎まで行けるか、一人は完全に把握しているのだった。

* * * * *

「よつ……と」

鍵の外れた窓を乗り越え、桂が床に降りた。

1・1（後書き）

変なところで切れていますが仕様です。気にしないでください。感想、意見、文句等ありましたらジャンジャン言って下さい。お願ひします。待ってます。

1・2（前書き）

前回と比べてかなり長くなりました。

「ほら」

と差し出された桂の手を借りて、できるだけ音のしないように乗り越える。

ギギッ、と鎧び付いた音がして、観音開きの洋風窓が閉まった。

「本日も華麗に侵入成功！」

「グッジョブ桂」

二人は荷物を持つと、じかに廊下の奥の部屋、応接室と書かれた扉へと向かつた。

ドアノブを下ろすとカシャン、と軽い音がして、大きな木の扉は簡単に開いた。

部屋の中は使われていた当時のまま、ソファーやテーブルが置かれている。学園は旧校舎を取り壊さなかつたばかりでなく、校内の大部分の備品（例えば黒板）をそのままにしておいたのだ。

この緩い管理体制は正直言つてどうかと思うが、今実際に歩たちがこうしていられるのは、間違いなく学校側の管理及びセキュリティが甘いお陰なのだ。あまり文句は言えない。

「はつあー、疲れたダルい」

ぐだつ、と手足を投げ出してソファーに寝つ転がる桂。スカートの裾が折れているが流石と言うべきか、まったく気にする様子はない。

「あのさー歩ー。いつも言つてるけど、なんで明日の予習なんてするんだ？ そんなのしなくたつて変わらないと思つんだが」

「あのねえ」

数学の問題集を開いて、歩は溜息をついた。

「みんながみんな、桂みたいに頭が良い訳じゃないの。分かる？」

「まあ確かにそうだけどさ、でも面倒臭いだろ」

「自分が頭良いことは否定しないのね……」

窓の外には並木道。黄色く色づいた葉が、季節が秋であることを知らせてくる。

10月の半ば、本日も快晴なり。

* * * * *

細かい字で設問の詰まつたページを3枚片付けふと顔を上げると、向かい側に寝転がっていた桂が静かな寝息をたてていた。さつきは歩が前後不覚に眠り込んでしまっていたが、あれはなかなかに珍しいことで、実際のところ授業中の睡眠が多いのは桂の方だ。歩はくすりと笑って、寝顔でも撮つておこうかと携帯電話を取り出しける。が、桂は寝返りを打ち、ソファーの背に顔を向けてしまつた。

「……面白くない」

小さくおどけて咳くと、また数式の世界へ没頭する。

そして十数分たつた頃。

「ん……」

再び顔を上げると、いつの間にか目を覚ました桂が、口元にしつすらとニヤニヤ笑いを浮かべてこっちを見ていた。

「どしたの」

「ヒマ」

「は?」

「だから、ヒマなんだって」

「……どうじりと言つのだろうか。一応部屋の中を見回してみるが、

当然何も無い。ある物と言えば、今日使つた教科書たちと、歩の広げている問題集くらいである。

「……問題集解く?」

「つがああー! 違う違うそつう言つんじやなくてだな

がばあ、と身を起こすと、桂は楽しそうにこう言つた。

「久し振りに探検しよう」

* * * * *

暖かく、仄かに埃臭い空気が流れている。体重を移動させる度、小さく軋む床。ちらちらと揺れる光が、足元を照らす。

「……やっぱり床腐つてるんじゃない？」

「えー、まっさか」

「踊り場の隅、穴開いてるんだけど」

「……」

二人は応接室を離れ、普段行くことのない地下へ向かっていた。二人が今いるのは、その地下へ続く階段。

* * * * *

数分前。

「探検？ 唐突と言うか何と言つか」

「いいじゃんヒマだし」

「それは桂が、でしょうに」

「大丈夫だジャイアン的思考が全てを解決してくれる！」

「……桂？ やっぱりまだ寝が足りないんじゃ」

「何を言う。こんなに私の頭は光り輝いているというのにー！」

「それ世界史の柳瀬に言つたら殺されるわよアンタ」

柳瀬克喜、職業：教師（世界史）。後頭部に本人は十円と言い張る輝き有り。生徒たちの見立てでは千円サイズらしい。

「ならば明晰と言い換えるのみ。ほらほら問題集なんて仕舞つた仕舞つた！」

何がそんなに楽しいのか、この友人の目が踊っている。

こうなつたらもう止められない。歩は本日何度もなるか分からな

い溜息をついた。

「で？ どこ行きたいの」

「上の階はあらかた制覇したからな……地下とか」

「地下」「

「うん。まだ行つてないし」

「まあ確かに行つてないけど……。ここ電気通つてないのよ？ 暗いじやない

「うむ。それはとっくに対処済みだ。見ろー！」

「ばばーん、と桂がテーブルの上に置いたのは。」

「……」

「どう、どう？ ナイスだろ？」

「……ッんなモンどつから持つてきたああつー！」

ガシャリ、と無造作に置かれたそれは、煤の汚れがひびく、一皿で年代物と分かる、

ランプだった。化学の実験で使つようなやつじやなくて、正真正銘の、ランプ。

「いやー、流石旧校舎。探せばあるもんだね

「な……なんでそんなものが」

「なんか五階の元美術室に転がつてた」

「嘘！？」

「いやホント、マジド。先週旧校舎うろついてたら見つけた」

恐るべし旧校舎、七八年の歴史。といつか本当に大丈夫かこの学園。探せば似たような物がざくざく出てきやうだ。

「マッチもあるし、これで地下の暗さはノープロブレム」

「マッチ……桂つて本当に用意が良いのね、ちょっと感心」

「ん？ マッチはそこに転がつてたんだが

「……頭痛い何な旧校舎

とこんなやりとりがあつたかどつかはさて置いて、結局一人は旧校舎の地下へ向かうことになつたのだった。

* * * * *

「地下つてこんなだつたんだな」

「ランプ、必要なかつたね」

「かも」

強度の怪しい階段をおつかなびつくり下りて着いたは地下一階。しかし地下にしては随分明るい。見回してみると、天井に小さな窓が並んでいる。そこから日の光が差し込んで、廊下を柔らかく照らしていた。

「そういえば、裏庭に小さなガラス板が嵌め込んであつたはず」

「あ、そうなの？ ジヤあそれが明り取りだつた、つてことね」

世の中知らないことが多いものだ。殊、この旧校舎に関しては。

地下に来て何もしないのもアレなので、とりあえずのフロアを歩き回つてみることにした。

歩は右、桂は左。階段から一手に分かれ、面白そなものを見つけたら声をかける。……と言つても面白そなものなんて見つからないのが常なのが。

壁伝いに、歩く。天井の明り取りがあるとは言え、照らされているのは廊下の中央部分のみ。端には光が届ききらず、闇が濛々んでいる。後ろを振り返ると、桂の持つランプが小さく揺れているのが見えた。ゆらゆらと幻想的に仄光る、オレンジ色の炎。

「……」

ただ単純に、きれいだな、と思った。見つめていると、小さく、小さく、どんどん遠くなつていく。そういえば桂は歩くのが速いんだつたつ。

「ふう」

首の向きを戻し、歩き出たとして

「あれ

手に当たる感触に、違和感を覚えた。それまで若干頼りない板張りだったはずの壁が、つるりとしている。まるで石のようだ。ぺたぺたと周囲の壁を触つてみるが、返つてくる感触は全て木材。どうやら歩の前にある10cm×20cmの、この部分だけが石でできているらしい。これは『面白いもの』に、

「……ま、入るでしょう、当然」

おーい、と遠くにいる桂を呼ぶ。

遠ざかっていく搖らめきが止まり、すぐに桂が走ってきた。

「何、何、面白いものあつた？」

「これなんだけど……桂、ちょっとここに照らして」

ランプに照らし出されたのは、予想通り、板張りの中に一つだけ埋め込まれたタイルだつた。

色は茶色。触らず、見るだけだつたら気付かなかつたひつと思われた。

「見るからに怪しいー」

「賛成」

「うーん……」

なにやら桂が小難しい顔をして唸つている。

「何？」

「いや、よくあるお話とかだとさー」

「うん？」

「ひつひつて大体は」

そう言つと、桂はタイルをコン、と叩いた。

「隠し部屋の扉だつたりするんだよねー……つて、え？」

「……え？」

二人同時に間抜けな声を上げたその様子は、傍そばで見ている人がいたらさぞ見物みものだつことだろう。

桂がタイルを叩いた次の瞬間、軽い音をたてて、タイルがすっぽ抜けたのだ。奥に、ではない。手前に、歩たちのいる方向へ。

「えーっと……？」

「ちゅうと貸して」

桂の手からランプを借りると、歩は今タイルが抜けでできた空洞に、顔を近づけた。

「ああ、やつぱり」

「何がわ」

「ほら」

歩が指差した空洞には、小さなバネが並んでいた。外から衝撃を引いて、タイルが内側でなく外側へ抜けたのはこのためだつたのだ。

「でも何でこんな仕掛けが……？」

「あ、桂」

歩はもう一度空洞を指差す。

「や、だから……あ」

桂は気付いた。バネの並んだ、その奥に見える、金色をした細長い金属は、

「ドア……の取っ手？」

「多分ね」

こんな所に何故、ドアが隠されているのか？ 全くもつて不思議だ。知りたい。

しかし歩の直感はこう告げていた。

関わらないほうが良い。面倒なことになる、と。ところが直感に耳を傾けない、もしくは直感で生きているような人間はどこにでもいるもので。

「……ちゅうと？ 何やつてるの？」

「え？ いやいや開けてみようかと」

「馬鹿でしょ」

「つそんなザックリ言わなくとも」

「見るからに『面倒なこと』なのに全く気がしないのは馬鹿じゃないの？」

「馬鹿です」

「いやまあ分かってるけど……開く？」

「多分……お」

キシッ、と小さな軋みの音と共に、ゆっくりとドアが開く。ちなみに周囲の板張りもドア型に切られていたらしく、普通のドアと大きさは変わらなかつた。

「開いたけど……」

「開いたやつたね……」

「うん……」

顔を見合わせ、ドアを見つめる。扉の向こうは暗闇に包まれ、何があるのかさっぱり見えない。

その内、

どちらからともなく、

「あれ？」

「……うるさい」

「さつきは文句言つてたのに入るんですか歩サン？」

「うつさい黙んなさい」

扉を開き見る。

むわっ、とよく分からぬ匂いが溢れた。しかし悪い匂いではない。

「桂、先

「ん」

ランプを持つた桂を先頭に立たせ、歩は後に続く。足を踏み入れた瞬間、柔らかい感触が返ってきて、

（まずいっ！？ 床が腐つてゐる！）

と慌てたが、すぐにその正体に気付いた。

士だ。

土が敷き詰められている部屋なのだ。しかも余程広いらしく、音の反響が無い。

先程からの匂いはまだ続いている。何の匂いだつけ？ と首を捻るが、思い出せない。

「桂一、これ何の匂いだつけ

「」

「桂？」

顔を覗き込もうとして、

「むぐつ！？」

口を塞がれた。同時にランプが消える。

どうしたの？ と聞こうとして、思わず動きを止めた。

「誰かいる」

低く、桂が囁いたからだ。

（え、嘘！？ まづい、見つかつたら）

立ち入り禁止の旧校舎にて、しかも念入りに隠されていた部屋の中に入ってきたのだ。おそらく見つかつたら、ただでは済まないだろう。

慌てる歩を余所に、足音が近づいてくる。

桂の息遣いが荒い。手が汗ばんでいる。

身を硬くする一人の、数メートル手前で、足音が止まった。

（何……見逃してくれる？）

思いつつ、そんなことはないだろう、と頭を振ったその瞬間。

「誰だ」

厳しい声が浴びせられた。

1・2（後書き）

下書きの五割り増しになりました。全てパソコンの魔力です。

感想、意見、文句等ありましたら、ジャンジャン書いてください！
待っています！

1・3 (前書き)

なんとか……ふつ。

「誰だ」

もう一度ゆつくつと、声が繰り返す。若い男の声だった。しゃがみ込んだ一人を威圧するように、声は上から降つてくる。じりつ、と歩の足元が音をたてた。

(……つおおおおつ！？)

隣にいる桂から、この阿呆ツとでも言つたそつた空気がビシバシ伝わつてくる。申し訳ない。

「……ビバシよつ？」

小声で桂に尋ねる。このまま時間が過ぎていくのだけは避けたい。プレッシャー的に絶対耐えられない。そしてしゃがんだままなので足がツライ。無理。

「そうだな……」

「何か良い案、ある？」

桂は暫く考え込むと、首を上げた(気配でそつと知れる)。

「逃げる」

「うんまあそだらうね」

今更何を言つているのだコイツは。聞いているのは逃げる手段のはずだつたのに。

「私が聞いているのは行動じゃなくてその手段なんだけど」

「三歩進んで一歩下がる」

「逃げてないじゃん！」

こつこつ時まで無駄なボケをかますのはやめてほしい。

「まあ冗談は置いといて」

当たり前。

「時間稼ぐから、扉開けて」

「……りょー」

そもそもここに入つてきてからそれ程の距離を進んでいない。精々

四、五メートルといったところだらう。あの重い扉を開けさえすれば後は簡単逃げるだけ。そして相手には誰だったのかさえ分からない。

トンツ、と足踏みの音がした。

「俺は待つのが嫌いなんだが」

焦れたように数メートル先からの声がする。一いつは言つても歩たちが話している間待つていてくれたのだから、この声の主もなかなかに辛抱強い性格なのかも知れなかつた。まったく、これが噂に聞くツンデレというヤツかしら、キヤツ。……コホン。

「お待たせして申し訳ありません。少々逃げる手筈を整えていたものですから、ね」

桂が立ち上がつた。歩は低い姿勢のまま、音を立てないように後ずさる。そしてぐるりと後ろを向いて、ゆっくりと進みながら、扉を探す。

自分の前方に壁があるかどうか、といつのは大体分かるものだ。今は後方で男が何か怒鳴つていてくれるから、非常に探しやすい。

(……ナイス、桂)

多分わざと挑発して怒らせたのだらう。殴られたりしなければいいけれど。

「ど……かな」

思つたよりも距離があるのか、中々壁の気配がしない。正直そろそろ見つかってくれないと困る。予想より早く男が怒り出してしまつたし、一般に怒つた人間は何をするか分からなものだ。特にそれが、若いとは言え歩たちよりずっと年上の男ともなれば、(まあ、……用心するに越したことは無い、って感じ?)

動くスピードを少し上げ、体も軽く起こして、素早く辺りを見回す。とりあえず右側へ、足を踏み出して重心を移動させた瞬間、ゴツツ。と鈍い音が響いた。頭を、打つた。わりと勢いよく。歩はくらくらと眩暈のするのをなんとか抑え、今自分がぶつかつた物が何なのか、手を伸ばす。

ザラリとした感触。乾いた硬質な皮。

「これは……」

木だ。直径四十センチ程の木が生えているのだ。

「なんで……？」

ここは、部屋ではなかつたか？

妙なところに隠されていたとは言え、ここは別の部屋ではなかつたか？

光の無い、真っ暗闇の中第一木など育つはずも無い。しかし、歩の前にしつかりと立つ一本の木は、疑いよつも無く生きた木だ。叩いても搖らしてもビクともしない。

思えば。

この“部屋”に入った時に歩が感じたのは、“森の匂い”だった。

足を踏み入れたとき、柔らかな腐葉土の感触が返ってきた。

息を潜めてしゃがみ込んだとき、鳥の鳴く声を聞いた。

そして今。

立ち尽くして上を見上げる歩の耳には、確かに木の葉のざわめく音が聞こえる。

意識した瞬間。自分が気付いていなかつた、いや、見過ぎしていた様々な物事が湧き上がり、渦を巻き、凄まじい奔流となつて歩を押し流そうとする。

今なら分かる。ここは違つ。ここはもつ、学園の旧校舎の中なんかじゃない。

もつと違う……別の、異質などこか。

「ど、こ」なの。

声は掠れる。届かない。

急に心細くなつて、歩は走り出した。

途中何度か木の根だらうものに引っかかり、多分大きな迂回を繰り返して、

「あ

見つけた。

桂を、見つけた。
何故だかとても呼吸が乱れていて、疲れ切つているようだつたけれど、それは確かに桂だった。

「け……い、」

小さく呼びかけると、桂は「こちらを向いて、少し驚いたように目を見ついた。

「ああ……開けて来て、くれた？」

そうだ。桂は多分、気付いていない。ここが一体、『何』なのか。

「桂、聞いて。この部屋、ええと、『ここ』は、」

整理しながら話そうと、歩が口を開いた。その瞬間、

「お前えつ！」

怒鳴り声が飛んできて、ひつ、と歩は身を竦めた。

桂は露骨に嫌そうな顔をすると、舌打ちしながら声の方へ顔を向けた。

「撒^まいたと思つたのにな」

その言葉から察するに、どうやら桂は先程の男と大規模な追走劇を繰り広げていたらしかつた。

そういうする内に、ゼイゼイと息を切らしながら、男が現れる。

「お前！ 逃げ切れるとでも思ったか、残念だつたな、ここは俺の」

しかしその言葉は、桂の隣に立つ歩を視認した瞬間に途切れた。

「お、お前……お前たち……」

ふつふつと血が上つていいく。

それは際限なく男の顔を怒りに染めていく。
そして。

「ふ、たり組だつたのか！！」

ついに男が叫び声をあげた。

「俺を騙したな！」

獣のような咆哮を上げ、一人に飛びかかる。

「歩つ！」

桂は立ち尽くしている歩の手を引っ張り、走り出した。先程まで男に追いかけられていたため、もう体力は限界だ。それでも、捕まるわけにはいかない。

「おい歩つ！ 走れ！」

今、歩はほとんど桂に引きずられるようにして走っている。恐怖で足が竦んでいるのか、それともどこか足を怪我でもしているのか。背後からは男の荒々しい足音が聞こえてくる。もう、男との距離は数メートルしかない。

もう、駄目だ。

桂が諦めかけた、その時。

ざあつ

と風が吹いた。

「……は？」

思わず走ることも忘れ、桂の口から、そんな言葉がこぼれ出た。

* * * * *

歩は必死に考えていた。

さつき、歩は桂を見つけた。

さつき、男が来るのが見えた。
さつき、男の顔の色の変化が見えた。

何故？

真つ暗闇ではなかつたの？

足元も、目の前も、隣を歩く桂の顔さえ見えないよつな、正真正銘の、真つ暗闇のはずではなかつたの？

ぐるぐると考へながら、歩は答へが分かつてゐた。

ここは“森”なのだから。

それでも、そんなことは有り得ない、と理性と言ひつけの石頭が抵抗する。

有り得ない。有つてたまるか、と。

しかし。

「……は？」

桂の声が耳に届く。確かな風を感じる。

歩は上を、いや、空を見上げた。

「ああ

やつぱり。

風が吹き、木々が揺れ、その隙間から見える空の雲が払われ、銀色に輝く月が顔を出した。

「なん、で

桂が呆然としたように呴く。

「さつき、言えなかつたよね」

木の根に引っかかって倒れていた男が、喚きながら走つてくれる。

「ここはもう、『違う』場所なの、桂」

「『違う』……」

「そう」

もうすぐそこに男が迫つてきている。

歩は振り返つて、男を見た。

（どうせなら殴らないで欲しいなあ……）

もう走る気力も失せて、ぼんやりとそんなことを考える。

と、

歩は男が、ブン、と大きく腕を振り、何かを握り込んだのを見た。

直感的に理解する。

今、風を掴んだのだ、と。

男は、その握り込んだ手を、ぱつと広げて歩たちの方へ向けた。掴んだものを投げるような仕草。

次の瞬間だった。

轟ツ！

と凄まじい勢いの風が広がつて呆氣なく歩たちを吹き飛ばし、地面に叩き付けたのだった。

1・3（後書き）

前回からせつかり一ヶ月空いてしまいました。……反省します。

感想、意見、文句等あつまいたら、ジャンジャン書いて下せば、お願いします。

1・4（前書き）

一ヶ月以上間が空いてしまいました・・・

幽かな声が聞こえた気がして、歩は薄く目を開いた。

夜だ。また、と言つべきか、まだ、と言つべきか。

隣に輝く月光は、部屋の中で暗く沈む家具の輪郭を浮かび上がらせている。

(二二二……ど二だらう)

そう広くはない部屋。明らかに歩のいつも暮らしている部屋ではない。

歩は窓際に置かれたベッドに寝かせられているようだ。暖かな毛布を体の上から除け、そつと床に降り立つ。

月が。銀に光る月が、濃紺の暗闇にぽつかりと浮かんでいる。大きく開け放たれた窓から、柔らかい夜の匂いが入つて来る。視線を下げると、黒い、森のシルエットが見えた。

「あ

少し、思い出した。

夜の森で、何か知らんが少しばかりブチ切れなさつた男に追い掛け回された拳句桂もろとも土の上に叩きつけられ……少しじやなかつた全部思い出した。

「だとするとここは……」

あのブチ切れ男の棲み家だらうか？ それにしては随分と扱いが親切な気がするが。

それに、窓からの景色から推測するにこの部屋は二階ほどの高さにある。一人だけで二階建ての家に住むのは、まあ絶対に無いとは言いい切れないがまず無いだらう。

だとすれば、ブチ切れ男とは無関係の誰かが運んでくれたか、それとも……

「……ふあつつくしゅ……」
くしゃみが出た。

「心、誰が私の尊厳して、おもへじ

止められなくなつてしまつた。

近くの椅子にかけてあつたブレザーを羽織る。鼻がムズムズする。
「ティツシュティツシュ……は無いか」

おおおおくつ、おうほへた、くつ、とへて馬ながら
ベッドの上に座る。つこでにわき除けた毛布も膝の上に。

同上

こんな風にただ月を眺めるのは久し振りかも知れない。子供の頃、毎年秋が近くなると、近くの公園に家族で出かけて月見をしたものだ。勿論月見団子を買って行つて食べるのだが、所詮は子供、歩は結局月よりも団子の方ばかり気にしていた。当然家族ぐるみの付き合いである桂もそこにいて、最後の一個をどっちが食べるとか、下らない言い争いをしていたつ……。

あれそこには「

木口のさじ行
力の力全

それとも捕まつてしまつたのだろうか？

「もしかすると、この歩かしる建物の中には、桂もいるかも知れない。」

くすつと笑う。

一でも、もうしそうなら……

タツ、とベッドから降りて、部屋の反対側の壁にあるドアへ向かう。今もし隣の部屋に桂がいるなら、すぐに起こしてここを逃げ出そう。ブチ切れ男の棲み家だと決まった訳ではないけれど、ここが知らない場所であることは変わりないのである。

やがて歩か思ってエアのノブに手をかけて下をそむけたまゝにその時。

羨く後戻^{アラシ}へ、獸の呑^{アヒ}び声。

「なつ……一？」

ドアノブから手を離して、窓へ走り寄る。

そうして、鳴き声の主を探そうと窓の下に手を凝らして、いきなり何かが月光を遮った。

訝しく思つて顔を上げる。ギョツとした。

何か、大きな鳥のようなモノが、羽ばたきながら物凄い勢いで向かってくる。窓を大きく開けて隠れもせず、無防備に体を晒している歩の方へ、一直線に。

咄嗟にベッドから転がり落ちる。

ぐわっしゃあああああん！

間髪入れずに窓が吹き飛ばされた。

キラキラとガラスの破片が舞い散つて、季節外れのダイヤモンドダストを思わせる。

みしり。と床が音をたてる。

窓をぶち破つた鳥のような獸はベッドを飛び越え、ガラスの破片を撒き散らしながら、部屋の反対側に着地していった。

みしり。再び床が悲鳴をあげる。美しい闖入者は堂々と足を踏みしめ、立ち上がつた。

ほ……と息が漏れる。

月の光を浴びて銀に輝く獸は、途方も無く美しかつた。

狼のような力強い体躯。そして未だ大きく広げられたままの、翼。

一切の無駄と不足の無い、完成された生き物。

みしり。獸が一步踏み出す。

みしり。もう一步。

爛^{らん}と光る緑の目が、歩をひたと見据える。

(……う、わ)

体が動いてくれない。

歩は何もできな^いまま、床を軋ませて近づいてくる獸を、ただ呆と見つめる。

みしり、みしり。

しなやかな足が、歩の田の前に置かれた。大型の肉食動物を思わせる鋭い爪を見つけて、歩は思わず後退る。背中がベッドの木枠にぶつかって、コンと非情な音をたてた。逃げ場は無い。

歩は獸を見上げる。獸は歩を見下ろす。

時間だけが過ぎていく。

ふいに。ぐる、と鳴いて、獸が鼻面を近付けてきた。

(うつ……)

ガチガチに固まる歩を余所に、獸はふんふんと歩の匂いを嗅いでいる。

(うつ……) これはアレだ食物の匂いを嗅いで食べ頃を調べるという

野生動物の習慣か！

ちなみにそんな習慣は野生動物は持っていない。彼らのモットーは簡単、「食えるときに食つ」。実にシンプルだ。

必死に息を潜めて田をつぶり、何とかやり過^いしそうと頑張^やる歩を見て、獸はようやく（歩の視点からすると）食品検査を止めてくれた。ふつ、と息を吐いて田を開けると。

本田一度田の「ギヨシ」な光景が待っていた。

獸は何を思ったか、歩の肩に鼻先を乗つけて眠っていた。安心しきつた子供がするように、蹲つて、幸せそうに田を開じて。

(えつと……)

動いたら食われる！ 訳ではないと思つが、それでもここで動いたら確実に獸の機嫌は悪くなるだろ^う。この人生の最期の光景が視界いっぱいに開かれた動物の口、なんてできつる限り避けたいものだ。それに、第一ガラスの破片がそこら中に散らばっているから、危な^くつて下手に身動きも取れやしない。

(どうじよつ……?)

と、途方に暮れる歩の耳が、扉の外を走る足音を捉えた。かなり慌しく駆けて来る足音は、歩の部屋の前で止まる。

ガチャッ、と音がして、ドアが開かれた。

（桂……？）

ドアから現れたのは、桂に似て細い、けれど明らかに桂とは違う、青年だった。

青年は部屋の惨状と、歩と獸の様子を見て、一瞬足を止めた。そして歩に、

「動かないで下さー！」

と声をかけるや否や走り寄ってきて、獸の、

「あっ」

驚いたことごとく、青年は獸の口先を手で押さえ、ぐいっと歩から離した。

ぐるる、と獸が田を覚まして小さく唸る。しかし青年が頭を撫でると、すぐに大人しくなってしまった。

歩はポカンとしたまま、この不思議な青年を見る。

青年は歩の視線に気付くと、穏やかににこりと笑った。

「よく寝ていらっしゃいましたね、ナギさん」

「はあ」

うまく言葉が返せない。

ここは何処だとか、この獸は何なのかとか、貴方は誰だとか、何故歩の名前を知っているのかとか、それでも苗字で呼ぶのは何故だとか色々と訊きたいことは山のようにあるが、とりあえず歩の口から出たのはこんな文。

「えつと……桂はどこですか」

そのセリフに青年は一瞬キョトンとした顔をすると、ああ、と頷いた。

「ケイさんなり……」

青年が言いかけたその時、
ガツチャン！

と凄まじい音をたてて、部屋のドアが開いた。

「おいアレフ！ やつをからここの部屋喧しい……

あれ、歩じや

ん。起きたんだおはよっ」

桂が顔を出した。

足音が三人分、壁に反響している。

歩と桂は青年に案内され、ひょろ長い廊下を歩いていた。青年はゆつたりとした足取りで、どこかへ向かっている。数メートルほど後ろに続く一人はと言えば、

「どこに行くの、これ」

「さあ？」

こそそと気の抜けた会話を交わしていた。

「つていうかあの人誰なの、知り合い？」

「んー、知り合つて一日」

「一日で名前呼び捨て！？」

「文句言われないし。良いんじやん？」

「へ、へえー……」

青年の名前はアレフと言つのだ、と桂に教えてもらつた。恐らくは十くらいも年上であろう人を躊躇無く呼び捨てにできる度胸は、歩には備わっていない。

前を進んでいた青年、改めアレフが、立ち止まつて振り返る。

「そう言えど、自己紹介がまだでした。僕は、アレフ・ラウハン」と言います。初めてして、ナギさん

「あ、えと、凧谷、歩です。初めてして」

と言つた歩の言葉を聞いて、アレフは怪訝そうな顔をして首を傾げた。

「アコムさん、と仰るのですか？ 僕はてつかり、ナギさんといつお名前のかどばかり

「いえ、私の名前は歩ですけど……」

そつなんですか？ とアレフはモガモガと咳きながら、何故か桂の方をちらつと見る。

ははあ、さては。

歩はにつゝり笑顔を作つて、隣にいる黒髪バカの方へ向けた。

「桂？」

「なんざんしょ」

「この人に何を吹き込んだのか吐きなさい」とつが吐け今すぐ！」

「えーっと……」

桂は「いち、に、……」と指を折ると、ペカー、といつ文字が背後に浮かんできそうな笑顔を浮かべた。

「余りにも多すぎて何を言つたのか忘れてしましたよすまないナギ痛あつっ！？」

「だから何それ」

とりあえず桂の顎に下から強烈なパンパン（アーパン？）をお見舞いする。

「……つてて……歩つて結構凶暴だよなつてあああああああストップ！－！その指ストップ絶対痛いからそれ！－！」

「なんでこのバカはこうも馬鹿なことばかりするんじょうねえ……？ ああバカだからか」

「待つて待つて歩サンその暗い笑顔怖い！ 怖いよ－！」

うあああああ、と引きつる桂の耳をぎゅうううううーーと引っ張つてやろうと手を伸ばして、

（……ちょっと待つて）

歩ははたと動きを止めた。

（よく考えると、ううん、よく考えなくとも、こんなことしてる場合じゃないんじゃない？）

いきなり窓ガラスぶち破つて羽生やした狼（馬並みサイズ）が突っ込んできたりそれを同じくいきなり突入してきたアレフが宥めちゃつたりそういうふうしている内にひょつこり桂が現れたり、していたせいですっかり忘れていた。

「ハ、どいやねんて。

つこHセ関西弁が口から出てしまつくらい深刻な事態なのを忘れちゃつていて。凪谷歩、世紀の大失態である。もう正直呼び名とかナギだらうがネギだらうがどうでもいい感じである。

前を見ると、先程からの一ひと見守つているアレフの姿がある。アレフは、桂から何か聞いているんだろうか。

突然動かなくなつた歩を、ん？ と不思議そうに見ている桂の袖をくいくい、引っ張つて、耳貸せ、と合図する。

少し桂に屈みでもらつて（何ともシャクなことに、桂と歩の身長差はかなりある）、

「ここ、何処？」

囁く。

暫く桂は考えていたが、

「……あー

……何、その面倒臭そうな声。

「歩には説明してなかつたなあ……そーだつたそーだつた。忘れてた。ソーリー」

全く謝罪の意思が見られないがソレはソレとして後できつーく叱るとして。

「……どうこいつこと？」

「えつと、まあ、その、アレだ。ベタな言い方すれば、きつとその瞬間の歩の表情は、さぞ滑稽などこのモードメントみたいになつていていたに違ひない。

「異世界来ちゃいました、つてやつ？」

「……はあ？」

1・5（後書き）

「意見・「感想などありましたら、何でもビシバシ言つていただけ
ると作者のテンションとやる気がぐんぐんアップします（決して
作者はMではありません）。

「はあ？」

歩はもう一度繰り返した。

意味が分からない。いや全く意味が分からない。

「今……何て？」

「いやあ、だからさ」「さりとて

桂は軽く頬を搔くと、ボソッと呟いた。

「さては理解が追いついてないねナギ君」

「今……何・て・？」「

「何デモナイデスヨ、ヒヒ」

「へえ

「ええつとなあ……」

簡単に説明するにはどうすりやいいのかな……、と言つて、何故か桂はアレフの方をちらりと見た。

「え、僕、ですか」

「後はよろしく」

「えええつー？」

誠に無責任な態度であると思つ。本当に。

いや僕にはそんな説明なんて無理ですよケイさあんとか言つていたアレフだが、しばらくして収まつた（とこより諦めた）と見える。

「その、ですね、」

アレフが説明しようと口を開いた。

「……あつくしょんーーー！」

歩の盛大なくしゃみによつて遮られた。

見ると、出鼻をぐじかれて沈んでいるアレフがいた。

「ごめんアレフ。

* * * * *

「つたく……寒いなら寒いって言やあここの」

「そんなに寒いと思わないんだけどなあ……」

「ハイ文句言わない」

「ええー……」

廊下に立ち放しで話すのも何だらうとこいつら、当初の目的地へ急ぐこととなつた。

アレフに案内されて到着したのは、学校の教室よりも一回り広いくらいの部屋。真ん中に橢円形の大きなテーブルとその周りに椅子が置かれ、大勢で食事ができそうだ。

歩と桂は、テーブルの扉側に並んで座つている。アレフは何か軽い毛布のような物を探してきます、と囁つて、今はいない。

「うあー、ねみ眠……」

「ちょっとー。寝ないでよー？」

「仕方ないだろ私は夜中に叩き起されたんだぞ！ 隣の部屋でガラス割れたりミシミシ言つたりドタバタしたり！ あれで寝てられるか阿呆」

「それは……」めん

「全くだ」

「でもあんまり私の責任でもないような……？」

「黙れ歩もあのグリフィンと同罪だ同罪、安・眠・妨・害ー。安らかな眠りの時間をどうしてくれる」

「うう……」

確かに眠つてはいるところを起されたのはとても腹が立つことだ（経験有）。しかし。

「でもね、桂？ 今現在私が置かれてる状況をもう少しあーっと考えてほしいんだけど……」

「ああ、歩も眠い？ だろ、やっぱり夜は眠くなるつて！」

「いや、そういう意味じゃなくて」

「何、歩の置かれてるこれ以外の状況……？ む、難しい……」

「難しくないよ」の部屋に来るまでのことを思い返せば普通に分かることだよ！

何でこんなのが学校で成績優秀者やつてるんだわ！」世の中って理不尽だ。

「説明！ 異世界ってどうこいつ」とか説明してくれるんでしょ？」

「…………？…………ああ」

絶対忘れてた。

何て奴だ。けしからん。

桂はぐて一つ、とだらしなく腕を伸ばすと、本当に面倒臭そうにハアとため息をついた。

「あー、アレフいないのか…………めんど」

「目が覚めてからこいつ、意味分かんないことが多すぎて混乱しつ放しなんだからね。ちやーんと説明しなさいよ」

「はいはい」

そうだなあー、と、桂は腕を組んで天井を見上げる。

歩もつられて上を見た。あ、埃。

「まず。もう何となく分かつてると想つけど、こいつは元の世界じゃない」

「う、うえい」

いきなり本題来ちゃったよ！ まだ心の準備できていよいよ全く！ わたわたする歩を完ツ全に無視して桂は話を続ける。

「別の世界、簡単に言えば『異世界』だ。多分旧校舎の、あの地下にあつた扉がこの世界に繋がつてたとか、そんなところだろ。で、説明だが」

「…………え、ええっと…………」

「この世界は四つの力でできている。風、火、水、土だ。四元素つて言った方が分かりやすいかも知れない。その力は大自然に属する物で人間が自由に使うことはできないんだが、実はほんの少しだけ、

思つままに操れるんだ。だからこの世界では、人の意志によつて風が固まり炎が歩き、水が飛んで土が流れる

「……？？」

「つまりいわゆる物理法則つてのはこの世界では全てに当てはまるわけじやないつてこと。変な生き物もいるぞ。さつき歩の部屋のガラス割つて突つ込んできた鳥狼な、あれはグリフィンだ。結構頭良いんだぞ」

「へえ……？」

「ちなみにこの世界での『馬』はグリフィンだ」

「ぶふつ……！？」

あれに乗るのか。狼に！！

「つて、待つて待つてちょっと情報過多……」

うづづー、と歩はこめかみを押さえる。

「えつと……それはつまり、ここは魔法が使えちゃつたりよく分からぬトンデモ生物がいたりする世界つてこと『デスカ』

「うん。そうだけど？」

『んッ、と鈍い音が響いて、同時にじんわりとした痛みが額に広がつた。どうやらテーブルに思い切り頭を打ち付けたらしい。大丈夫か自分。

「あの、一つ聞いていい？」

「何なりと」

「何で桂はそんなに順応してるわけ？」

そう聞くと、歩はふんっ、と鼻を鳴らして足を組み、偉そうに反り返つて言った。

「人間諦めが大事つて事」

「……」

「……」

「……そう」

「……うん」

何だ、桂も歩と同じじやないか。そう思つと体の力が抜けた気がし

た。

「そつか。うん、分かつた、理解したよ」

「なら良し」

不思議な気分だ。

今自分たちがいるのは『異世界』なのだそうだ。実感が、湧かない。

1-6 (後書き)

ザツツ尻切れトンボ。

だって、そうだろう。

「ここは異世界なんだゾ」

とか普通に言つてる人間がいたら間違いなく問答無用で精神科への通院をお勧めする。

それは何故か。簡単だ、『普通じゃない』からだ。

異世界なんてものは、おハナシの中にしか無いものだ。現実の世界には全く関わらないものだ。

納得した、と。目の前の人間に言つてみたところで元の世界に帰れるわけじゃない。

それに。

第一この世界は普通すぎる。

確かに翼の生えた狼という『有り得ない』の代表のような生き物がいる。

でも『ただそれだけ』でしかない。

狼に翼くつつけたらそれで完成じゃないか。巨大な鷲の翼をちゃんと切つて狼の背に縫い付ければ見た目だけでも完成じゃないか。難癖だ。紛う方無きいちゃもんだ。そんなことは分かっている。

でも。

有り得ない、と。異世界なんて無いんだ、と。自分の頭が否定するから。

例えば。

歩は椅子から立ち上がりつて、きょろきょろと辺りを見回す。

「……何探してんの？」

眺めていた桂が聞いた。

いや大したことじゃないんだよ？ 歩はテーブルの上に皿を向けて、

「あつた」

置いてあつた水差しを持ち上げた。

透明なガラスの水差しは、澄んだ水を湛えてゆらりと輝く。

「水が飲みたかったのか」

「つづん。『水差し』を探してたんじゃないけど、ちゃんと見つけたよ」

「？」

疑問符を浮かべる桂に、だからね、と前置きをして、

床へ、水をこぼす。

「へつ！？」

絨毯が湿る。

「あつ、こり何やつてんだよ」

桂が慌てたよつて言つて、水差しを引つたくろつと手を伸ばして、

ヒヨイ。

「……お」

ヒヨイ。

「……む」

ヒヨイ。

ヒヨイ。

「……」

「……」

「……」

～しほりくお待ち下れ～

ぜえ。

「…………お前なあ」

息を切らしながら桂が言つ。全く体力の無い奴め。

「だつて取られそうになつたら逃げない？」普通

「…………だからつてな」

「それに？ 動かされた通りにモノ追っかけるつて…… プブ、猫なの？」

「何だと！？ 本能に従つて何が悪いと！？」

「おおつと認めた！」

「ここでいきなりキレるんですか桂。

「本能なめんなよ本能すげえんだぞ！…… 主に日常生活とかで！」

「何だらう野性の勘を日常にどうやって生かすかすこく氣になる……」具体的に言うと曰美術室に転がつてランプを本能で察知した的な

「…………本能つて超視覚とか含んでたっけ？」

「そこは…………ホラ、こいつ…… ファジーに行こうか

「…………えー。

「…………というか話脱線してんだらうが阿呆…………！」

「…………

「…………

「…………

「…………

「…………

「………… そうだつた！？」

「忘れてたのかよ！」

ナイスツッコミニ素晴らしい。

でも稻川選手、全力で叫んだお陰で息切れでますよ、この体力無しめ。

「ケホッ……まあいい。とにかく説明しり、説明。絨毯に水こぼして何遊んでたんだ」

「あれ？ あ、そつか、そこに戻るんだ？」

「お前さつきの『…………そだつたーー』はどこの行つたんだよーー！」

額に青線入つてゐる入つてゐる。

「まあまあ。そうカツカしないで、ネ？」

「窒息させたらかこのアマ」

あの、桂、本氣で怖いよその顔？ 謎の濃い影差して表情見えないよ？

「やだな、もー。別に遊んでたんじゃないつてば、

言つて、水差しをテーブルの上に置く。

「物理法則」

「んあ？」

「この世界では物理法則なんて通用しない。さつき桂が言つたこと

「ああ、言つたな。それが、どうかしたか？」

桂は訝しげな顔をする。

「物理法則つて、『普通の世界』を支配するものでしょ？」

「うん、そうだな」

「で、水は勿論物理法則にしたがつでしょ？」

「うん、まあね」

「だから水こぼしたの」

「うん……うん？」

は？ と桂の顔に書いてある。理解不能、らしく。

1・7（後書き）

大分アップ遅れました。申し訳ないです・・・
しかもまた中途半端なところです。すみません。土下座です。
心の中で作者をしぶき倒しておいて下さい。痛くない程度に。

明日から実力考査ですよう。鬱ですね。ええ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4397v/>

扉の向こう

2012年1月10日17時51分発行